

# 身体教育を通じた身体観の変容可能性の探究（その2）

—運動観察の基礎となる身体的直観の検討—

高 橋 浩 二

The possibility of changing the viewpoint of human body through physical education (No.2) : a consideration in basic physical intuition for the observation of human movement

TAKAHASHI Koji

## Abstract

The purpose of this study is to show the possibility of changing the viewpoint of human body through physical education. For this purpose, in this paper, it is considered from basic physical intuition that can be treated in the observation of human movement.

The results are as follows. (1) Two bases of “Observation of human movement” are view of human body ideas and human movement. Different view of the observation change contents of its observation. The former is to see the body moved. The latter is the body which contents capability and actuality. (2) The object of observation of human movement is “dynamic gestalt”. The view of human body can be changed through this gestalt. (3) The change is from the “view of human body that is scientific knowledge and images by learning” to the “intuitive sense of the physical body appears to stand by that particular phenomenon through movement practice”.

The next paper will be considered concrete programs and learning method. It can be place the view of human body which can bring up in physical education. And it can be present the possibility of changing it.

**Key words:** viewpoint of human body, observation of human movement, physical intuition

キーワード：身体観, 運動観察, 身体的直観

## 序.

本研究の最終目的は、身体教育を通じた身体観の変容可能性を示すことである。この目的のために、以下のように考察を進めている。(1) 前稿では、運動実践における[まなざし]を身体運動との関係から考察した。この考察を通じて、運動実践による身体観の変容が[まなざし]の変容によって可能になることを示した。(2) 本稿では、身体教育において扱うことができる身体観について考察する。この身体観は、[まなざし]によって他者と関係づけられた「固有の身体」を基盤として生じている。この考察を通じて、[まなざし]と身体観との関係を明確にし、身体観教育の必要性を主張したい。(3) 最終稿では、身体観教育の具体的内容及び学習方法を検討する。この検討を通じて、身体教育を通じて育成することのできる事柄の一つとして身体観を位置づけ、その変容可能性を提示したい。

本研究では[まなざし]を次のように捉えている。すなわち、「[まなざし]は、『単に見ること』や『観察』とは異なり、行為者の意図が働いた状況で対象に対して注意を向けて見ること」<sup>1)</sup>である。

前稿では、[まなざし]について以下の事柄を示した。第一に[まなざし]が身体と密接な関係にあること、第二に[まなざし]が他者との相互作用を成立させること、第三に[まなざし]は固有の領分を基盤に働いていること、第四に運動実践による身体観の変容可能性は運動実践における[まなざし]の学習によって可能になること、である。

前稿の結論から、本稿では身体教育において扱うことができる身体観について考察する。この考察を通じて、[まなざし]と身体観との関係を明確にし、身体観教育の必要性を主張する。そのために本稿では、観察内容の差異によってどのように身体観が変移し得るのかを検討する。特に、スポーツ運動学において扱われている「運動観察」について検討し、その基礎となる運動観及び身体思想を見出す。

この思想は、運動観察における次の事柄を問題として取り上げることによって明らかになるであろう。すなわち、「運動を見るのか、身体を見るのか」という問題である。この問題は、指導場面だけではなく具体的な運動実践場面において扱われなければならない。なぜなら、我々は具体的な運動実践においてこそ「運動を見るのか、身体を見るのか」を判断し、行為しているからである。さらには、その判断が「状況を読むこと」に発展してゆく。この判断のためにも、基礎としてある身体観及び運動観を検討することが必要である。これら身体観が要因の一つとなり、運動実践における[まなざし]や運動観察がおこなわ

1) 高橋浩二, [2010], 「身体教育を通じた身体観の変容可能性の探究(その1) —運動実践における[まなざし]の考察から—」, 『大阪産業大学人間環境論集』, 9, 139-155頁.

れている。

現状を考えれば、なぜ多くの運動実践者や指導者が、自然科学的な身体観及び運動観をもち合わせているのだろうか、という問いが生じている。この問いの発生については、滝沢（2004a, 2004b, 2005, 2006）の身体観研究、瀧澤（1995）及び滝沢（2008）の身体論研究が参考になっている<sup>2)</sup>。彼は、身体観を4つの枠組み（実感、実践、学習、イメージ）が混在した状態で生成されていると述べ、望ましい身体観教育の必要性を主張している<sup>3)</sup>。また、新保（2009）は、自然科学分野から捉えた身体観を検討している。彼は、「自然科学的アプローチによって構築された身体観は、人間という存在における身体の『在り方』全体を捉える事ができないために、人々が日々生きる上での眼前の問題に対して対処的な回答しか与えることができないのではないか。」<sup>4)</sup>と問題提起し、「知的探究のプロセスから、我々の身体が、人間あるいは社会の要求する『完成図』に向けて人為的に制作しようという『身体観』をもたらしと言えよう。」<sup>5)</sup>と指摘している。このように、自然科学的な身体観及び運動観によって身体運動が解釈されている現状があり、批判的検討は数少ない。

## 1. 運動観察の基礎となる身体観

### 1-1. 運動観察における自己観察と他者観察

「運動を見るのか、身体を見るのか」についての問題を取り上げるにあたり、本稿では、スポーツ運動学の立場を検討する。『スポーツ運動学*Bewegungslehre*』の著者であるK・マイネル（1981）は、「たしかに、われわれは運動を見てはいる。もっと正確に言えば、(中略)、われわれは常に動かされている身体を見ているのであって、決して運動“それ自身”を見抜いているのではない。」<sup>6)</sup>と指摘し、ひとつの運動を捉える運動モルフォロジー<sup>7)</sup>の研究方法として二つの観察を挙げている。すなわち、「自己観察*Selbstbeobachtung*」と「他

---

2) 詳細は、参考文献リストにある滝沢の論文等を参照されたい。

3) 滝沢文雄, [2004a], 「現象学的観点からの『心身一体観』再考:『身体観』教育の必要性」, 『体育学研究』, 日本体育学会, 第49巻, 156頁。滝沢文雄, [2008], 「[[からだ]の教育」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学学会, 第30巻1号, 3頁。

4) 新保淳, [2009], 「科学的身体論～身体における自然性～」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第39巻, 29-37頁, 30頁。

5) 新保 [2009], 36頁。

6) マイネル, K., 金子明友訳, [1981], 『スポーツ運動学』, 大修館書店, 140頁。

7) 運動モルフォロジーについては、次の箇所を参照されたい。マイネル[1981], 106-109頁, 122-123頁。

者観察Fremdbeobachtung」である<sup>8)</sup>。自己観察は、自分自身の運動の自己知覚に基づいている<sup>9)</sup>。さらに、「自己知覚は運動覚が言語によってとらえられるときに初めて成立する。言語でとらえることは自己観察の前提条件でもある。」<sup>10)</sup>。すなわち、ただ単に自らが感じた内容だけでは自己観察をおこなったということにはならず、その感覚内容を言語として説明する必要があるということである。

このことについて、筆者自身のフリースキーを想起してみる。筆者は昨シーズンとそれ以前のシーズンでは自らの滑りの質が変化したと感じている。この変化について自己観察する。これまでであれば、斜度30°強の急斜面に対して165cmのスキー板でスピードを出した状態で滑っている時に、ターン前半から後半にかけてスキーのトップを雪面に「引っかけることができていた」が、昨シーズンは「引っかけることができなかった」のである。この「引っかける」という運動覚は、斜面に対して外スキートップのインエッジ及び内スキートップのアウトエッジが常に回転方向の内側に入り込んでいくという「感じの内容」である。無論、スキーテールについても同様のことが言える。しかし、筆者にとって重要なことは、スキーのトップを「引っかけることができなかった」ことである。マイネルが、「自分の運動を判断することは自己観察の基礎の上に行なわれる。」<sup>11)</sup>と指摘しているように、筆者が「引っかけることができなかった」と判断することができたのは、自らの運動覚に対し「引っかける」という言語を当てはめることができたからであり、その「引っかける」という運動覚とそれを表す言語化という自己観察をおこなうことができたということであろう<sup>12)</sup>。同様の指摘は、E. M.ヒンクス(1987)によっても言及されている。すなわち、「人がいかにムーブメントについて語るかは、その人がムーブメントをいかに考えているかによる」という言及である<sup>13)</sup>。

自己観察に対して他者観察は、他者の知覚に基づいている<sup>14)</sup>。特に指導者の他者観察に

8) マイネル[1981], 123-130頁, 訳注426-427頁。なお、運動モルフォロジー研究には、「比較研究法」がある。その方法は、より多くの運動経過を比較考察するための方法と位置づけられている。

マイネル [1981], 130-132頁。

9) マイネル[1981], 123頁。

10) マイネル[1981], 125頁。なお、「運動覚」とは、「まとまった器官をもつわけではなく複合的性質をもつ。適切な訓練をする場合に、運動の経過をきわめて正確に知らせてくれる。」と説明されている。

11) マイネル[1981], 125頁。

12) スキー用語では、通常トップを「引っかける」のではなく、「抑える」という用法が用いられる。しかし、その運動技術は同一の意味内容を示していないため、本稿では「引っかける」という語を用いている。

13) ヒンクス, E. M., 舛本直文訳, [1987], 『ムーブメント指導と言語の活用』, ケーン, J. E., 梅本二郎・川口貢監訳, 『ヒューマンムーブメントと体育』所収, 不昧堂出版, 50-55頁, 51頁。

14) マイネル[1981], 123頁。

は、「印象分析Eindrucksanalyse」が基礎として用いられている<sup>15)</sup>。ここでいう印象とは、「単に運動を見たときの感じといった主観的感情ではなく、本質的な諸カテゴリーから運動現象のなかの諸徴表を把握する前提を提供してくれるものである。」<sup>16)</sup>と説明されている。したがって、指導者が自分勝手な好みで学習者の運動を観察するのではなく、実践者の運動における本質を基礎に置きながら、彼／彼女ならではの「動きの感じ（徴表）」を把握するのである。

以上のマイネルの説明に対応して、金子（1987）は、「われわれはスポーツ運動の中に、部分に小間切れにできない、緊密な全体構造をもった意味ある運動経過を前景に立てなければならぬ。われわれがスポーツで運動を見るというときには、そのような“運動ゲシュタルト”を対象にしている」<sup>17)</sup>と述べ、マイネルの言う「動かされている身体」を「運動ゲシュタルト」<sup>18)</sup>として説明している。なお、金子は「運動ゲシュタルトは『動的ゲシュタルト（時間ゲシュタルト）』として『静的ゲシュタルト（空間ゲシュタルト）』の視覚形態から区別している」<sup>19)</sup>。例えば、静止している2つの点が一本の直線として結ばれてしまう集合とは異なり、ゲシュタルトとして見えている一連の運動は、時間経過とともに形態が変わるといふ点で区別しなければならない。しかし、その観察には問題がつかまとう。金子は、「現実にある運動が行われた場合、歴史的一回性の立場から言えば、その運動は二度と反復されはしない。その運動は、運動者個人と日付によって規定されるが故に、たとえ、同一人が同一課題を繰り返して行っても、そこに全く同一の運動ゲシュタルトを再現することはできない。」<sup>20)</sup>と指摘している。

以上のように、マイネルにおける「動かされた身体」は、「運動ゲシュタルト」として説明される。特に、それは「動的ゲシュタルト」として他のゲシュタルトと区別される。したがって、我々は「動かされた身体」を「動的ゲシュタルト」として見ていると考えることができる。

## 1-2. 身体的自己移入に支えられた運動観察

これまでの運動観察についての検討を通じて、冒頭の問いに対して一つの回答が出る。すなわち、我々は運動を見ているのだが、「動かされている身体」を見ているのである。

---

15) マイネル[1981], 127頁.

16) マイネル[1981], 453頁.

17) 金子[1987], 118頁.

18) この「運動ゲシュタルト」は、KLEMMからの用語である。「運動ゲシュタルトは身体による行為 (leibliches Tun) と捉えられ、その行為は相互に作用し合う特性をもった分節的全体を形づくる力をもつと規定されている。」金子[1987], 118頁.

19) 金子[1987], 119頁.

20) 金子[1987], 119頁.



この身体は「動的ゲシュタルト」としての身体である。しかし、この身体とは何か。もう一つの問いとして「身体」をどのように見るのかという問題が生ずる。本稿では、この問題に対して「身体観の変移」を検討したい。なぜなら、日常生活における我々の身体観がどのように移り変わっていくのかが明らかにされなければ、運動実践における身体の見方の「差異」あるいは「ずれ」に対する解答は出ないからである。さらに言えば、「身体観」が「静的ゲシュタルト」を示しているのか「動的ゲシュタルト」を示しているのかについて不明確なままで考察を進めることは問題が生ずる。

なお、金子（2009）は著書『スポーツ運動学』において、「自己観察」と「他者観察」について次のように言及している。すなわち、「ひとつは自らの運動の自己観察であり、もう一つは身体運動の他者観察、換言すれば他者の自己運動の内在経験の観察である。」<sup>21)</sup>という言及である。このうち他者観察は、他者自身の運動における「内側で起こっている事柄」を観察すると解釈できよう。さらに金子は、「もし自己観察の対象が動感意識の働かない自己運動なので、その動感化現象を観察することはできない。」<sup>22)</sup>と指摘し、「運動の他者観察でも事情は同じである。他者の実存運動の観察やその映像分析のなかで、印象分析と言った個人的な観察印象ないし心情的感想を述べても、それは超越論的な他者観察ではない。」<sup>23)</sup>と批判している。金子によれば、「そもそも自己観察というのは私の身体が動くときに今この動感志向性を超越論的に現象学する自己から観察するのであり、ここでは自己運動の発生的動感地平が分析対象となる。同様にして、他者観察もいうまでもなく他者の身体運動を外部から観察する科学的観察分析が意味されているのではない。」<sup>24)</sup>と注意している。特に彼は、他者観察について「身体移入原理」<sup>25)</sup>が必要であると言う。

本稿では、金子の身体移入原理に対して、前稿で取り上げたH・シュミッツの「身体的自己移入Einleibung」<sup>26)</sup>との関係を検討しなければならない。シュミッツ（1986）は、「身体的自己移入Einleibung」ないし「身体的コミュニケーションleibliche Kommunikation」によって相互作用が成立可能である<sup>27)</sup>、と説明し、例として「まなざし」を挙げている。

21) 金子[2009], 105頁.

22) 金子[2009], 105頁.なお、「動感」とは「運動感覚（キネステーズ）」の略語である。詳細は著書『身体知の形成』を参照されたい。金子明友, [2005], 『身体知の形成（上）』, 明和出版, 24-25頁.

23) 金子[2009], 105頁.

24) 金子[2009], 105-106頁.

25) 金子[2009], 106頁.この「身体移入原理」は、神経生理学者のヴァイツゼッカーが規定した用語である。「モノドとしての動感身体を移し入れるという移入経験はヴァイツゼッカーの医学的人間学の用語である」。金子[2009], 316頁.

26) シュミッツ, 小川侃編, [1986], 『身体と感情の現象学』, 産業図書, 58-67頁.

27) シュミッツ[1986], 147頁.

彼によれば、[まなざし]は「身体的方向定位」<sup>28)</sup>である。彼は、[まなざし]によって主体と他者とが関係を形成する時、精神的で心的な態度の交換よりもはるか以前に、身体的な形成、変形、評定が生じている、と述べている。その生成は、「たがいに身体的に自己を移入しあうことによって、大きな身体的全体を織りなしている」と説明され、例としてスポーツにおけるパートナーとの関係が挙げられている<sup>29)</sup>。特にこの移入は「相互的な身体的自己移入」<sup>30)</sup>であるという。なお、金子の言う「身体移入原理」には、「共感」の問題が絡んでくる。金子（1987）によれば、「ほんとうに実践的意義をもつ運動共感は、運動像を対象（Gegen-stand）として、向こう側に見て共感するのではない。運動想像力によって、自らその運動を実施するところに、初めて全的な意味での運動共感が成立する。つまり、観察対象になっている運動経過を改めて観察者自身の自己運動として、潜勢的（virtuell）にやってみて、それを観察するのだからなければならない。いわば、観察者による潜勢自己運動（virtuelle Selbstbewegung）として、観察する運動をイメージの中で遂行しながら、それを自己観察するのである。」<sup>31)</sup>と説明され、身体運動における「動的ゲシュタルト」と「静的ゲシュタルト」の共感が区別されている。運動観察においては、この「相互的な身体的自己移入」が基盤としてあるからこそ、運動共感が可能になると言えよう。したがって、「動的ゲシュタルト」を対象とした運動観察は、「相互的な身体的自己移入」を基盤に成立しており、それによって「運動共感」が引き起こされ、他者への潜勢自己運動が行われ、自己観察するのである。

これまでの説明のように、スポーツ運動学において運動観察は、「動かされている身体（特に動的ゲシュタルト）」を観察するのであり、自己の運動に対する知覚（自己観察）、他者の運動に対する他者自身の知覚（他者観察）を基にしている。さらには、動感（キネステーゼ）意識を対象とした「身体移入原理」によって運動観察者が観察をおこなっている。したがって、運動観察は、実践者の「知覚」、「キネステーゼ」、「身体移入原理」が基となっている。それによって「運動観」が生成されていると考えることができよう。この基礎には、運動観察を支える「相互的な身体的自己移入」がある。

このように、我々は運動観察を支える「相互的な身体的自己移入」の経験を通じて自らの身体観を生成している。なお、体育観及び身体観の諸問題については前稿において取り

28) シュミッツ[1986], 56頁。なお、彼はこの特別な意味について、「身体的方向定位は狭さから広さへと向うのであり、逆に広さから狭さへと向うのではない。」と説明している（シュミッツ[1986], 56頁.）。

29) シュミッツ[1986], 148-149頁。

30) シュミッツ[1986], 154頁。

31) 金子[1987], 123頁。

上げた<sup>32)</sup>が、多くの体育学者が「自然科学的」な身体観を持っていることがわかっている。例えば、2005年から2007年の「体育の科学」連載「体育人と身体観」を参照されたい。この特集には、24名の研究者及び教育者が紹介されている<sup>33)</sup>。しかし、「体育人と身体観」に関する検討からは、運動観について情報を得ることができない。我々は同一の運動観を保持し続けているのであろうか。あるいは、個々人が全く異なる運動観をもっており、普遍化することができないのであろうか。前述の運動観察から考えれば、我々は動かされている身体を見ていることになっている。それは運動ゲシュタルト、特に動的ゲシュタルトとして現れている。この動的ゲシュタルトを基礎にした運動観及び従来の静的ゲシュタルトを基礎とした運動観の二つを区別することができる。これまでの多くの体育学者は後者であると言えよう。

## 2. 身体の変化による身体観の変移

### 2-1. 身体の変化による運動観の変化

これまでの考察を基に本稿では、身体の変化によって運動観が変化した例を取り上げ、身体観の変移について考察したい。例えば、R. F.マーフィーは、著書『ボディ・サイレント』において、彼自身の身体麻痺による身体観の変移について詳述している。文化人類学者のマーフィーは、脊髄腫瘍による自らの身体の変化によって、身体環境の変化、さらには身体観の変移に至った過程について考察している。彼の変化の基準には、「痛み、身動きの取れなさ、孤独」が挙げられている<sup>34)</sup>。彼は、初めて腫瘍を宣告された時から車椅子生活を送るようになるまで、徐々に広がっていく「不安」があった<sup>35)</sup>と述べている。彼はその不安の原因について、「人々が私に対して前とはちがうふるまい方をすることもある。しかしそれよりも重要なのは、私が私自身に対して前とちがう感じ方をすることになったということだ。自分自身の心の内で私は変わった。自分自身に対するイメージが変わった。私という存在の根本条件が変わった。家族や友人の献身的な励ましにもかかわらず、私は独りぼっちで孤独だった。そして今の私は以前の私の劣悪化し縮小したもの、

32) 高橋浩二[2010], 148-150頁。

33) 体育の科学, [2005-2007], 「連載 体育人と身体観」, 『体育の科学』, 55 (7) - 57 (8). 杏林書院。  
例えば、自然科学領域を基礎学問として掲げている人物には、高島平三郎、藤村トヨ、吉田章信、東龍太郎、松井三雄、栗本義彦、福田邦三、鈴木慎次郎、猪飼道夫、等を挙げることができよう。

34) マーフィー, R・F, 辻信一訳, [2001], 『ボディ・サイレント』, 平凡社, 116頁。

35) マーフィー [2001], 153-154頁。



と感じられるのだった。』<sup>36)</sup>と述べている。ここに彼の運動観の変化が説明されていると言えよう。すなわち、自らの身体が「動ける」状態から「動けない」状態へ変化していくことによって、「動ける」という事故に対する運動観が変容していった。それが「不安」という形で表現されている。それを基にして自分自身に対するイメージ、そして存在の根本条件まで変わっていった。特に、自らを「劣悪化し縮小したもの」とまで表現するような状況になっている。ここに、運動観の変化による身体観あるいは人間観への変移を読み取ることも可能である。

ここで考えなければならないのが次の指摘である。マーフィーは、「できることとすること、つまり能力をもっていることと実際にそれを使うことの間には、相互に働きかけ増幅し合う関係があるものだ」<sup>37)</sup>と述べている。ここには「できる」という「可能態としての身体」と「する」という「現実態としての身体」の関係が指摘されている。彼は、自らの身体と運動の関係について、「足を使えば使うほどその能力は増すが、使わなければ萎縮し機能は低下し失われる。歩行を断念した結果、私の足はどんどん衰え初め、しまいには椅子やベッドから立ち上がることができなくなった。』<sup>38)</sup>と述べている。ここに彼の身体観の変移を読み取ることができる。すなわち、現実態の変化による可能態の変化である。

マーフィーによる考察は、決して脊髄腫瘍による機能低下を患った者だけに該当する事柄ではない。我々にとっても当てはまる事柄である。すでに述べたように、私のフリースキーにおいて「引っかけることができる」ことと「引っかけ」ことの間にも同じ関係が生じている。すなわち、自己観察の結果が運動観に影響を与え、現実態の変化による可能態の変化を通じて身体観に影響を与えたと言えよう。

本稿では、筆者自身の体験を想起し、身体観の変移について考察する。筆者は、講義科目を担当する教員であり、スポーツ実践を学びたいと考えている本学の学生たちにとって筆者は「運動ができない、座学を教える教員」として見えているようである。より焦点化すれば、筆者の身体から「可能態が見えない」という見方がされているということである。彼らは筆者の現実態を見て、筆者の可能態を他の教員と比較して判断する。しかし、彼らと共に運動を実践することによってその見方が変容する。すなわち、身体観が運動実践によって変移するということである。例えば、彼らは筆者が首倒立をしている姿を見ることによって「体幹が強い」と評価する。この評価には基となる身体観があると言えよう。すなわち、「細身の体型であり、力強さが無い」という「現実態としての身体観」である。

---

36) マーフィー [2001], 154頁.

37) マーフィー [2001], 277頁.

38) マーフィー [2001], 277頁.

それが運動を見ること、共に運動を実践することによって筆者に対する身体観が変容する。また、彼らは筆者の腹を見て「意外と腹が出ている」と評価する。ここには、先の例とは逆の身体観を読み取ることができる。すなわち、体幹が強いことが筋肉質であることを示した「現実態としての身体観」である。またある時には、「体操の先生かと思っていた」と評価される。この評価は肩幅が広く、胴体が細い、等といった「可能態としての身体観」である。なお、これらはあくまで「運動実践」という枠組みから捉えた身体観である、という点に注意しなければならない。筆者自身の身体や運動を見たことがない他者には、すでに述べたスキーヤーとしての筆者の能力を図り知ることはできない。さらに言えば、筆者の利き腕を知ることもできない。身体観自体は、このように運動あるいは行動することによって立ち現われるのであり、実践による了解を経て、変移し得るのである。

また、R・カーソン（2010）の著書『46年目の光』の中で、主人公である視力を失ったマイク・メイは「触れることのできないものは、ただの抽象的な概念にすぎない。」<sup>39)</sup>と述べている。彼は、3歳の時に不慮の事故で視力を失ったが、46歳の時に眼の幹細胞移植手術により視力が回復した。手術を受ける前に彼は次のように述べている。「最近、自分のアイデンティティについて考えるようになった。視覚障害者という立場を失えば、これまでやってきた『特別なこと』が『あたりまえ』と思われるようになるかもしれない」<sup>40)</sup>。彼の考えは、可能態と現実態の対比及び転換への不安として捉えることができよう。すなわち、他者にとってはメイの可能態と現実態の把握が難しい。メイ自身にとっても他者からの可能態と現実態についての評価を覆すだけの自信があった。それが無くなることへの不安がある。また、彼は手術後に、「本当の意味で『見る』ためには手で触れる必要があると感じた。」<sup>41)</sup>と述べ、「おれにとって見ることは、外国語をしゃべるようなものなんだ」<sup>42)</sup>と分析している。すなわち、彼にとって「見る」ことは、手で触れること、論理的思考を働かせること、何らかの手がかりから探ることによって、今何が見えているのかを考え、全ての要素を意識的に組み合わせなければならない<sup>43)</sup>、ということである。彼によれば、そのためには「文脈と予測」<sup>44)</sup>が鍵であると言う。ここに彼の「見る」ことと「触れる」こととの関係を見出すことができる。すなわち、彼にとっては、「触れる」ことによって情報を収集し、論理的思考によって像を作り上げているということである。

39) カーソン, R., 池村千秋訳, [2010], 『46年目の光』, NTT出版, 49頁.

40) カーソン[2010], 176頁.

41) カーソン[2010], 204頁.

42) カーソン[2010], 280頁.

43) カーソン[2010], 280頁.

44) カーソン[2010], 314頁.

付言すれば、彼は「太った女性」を初めて見た時に、嫌悪感を覚えたという<sup>45)</sup>。彼によれば、「目が見えなかったころは、そんなふうを感じたことなんて一度もなかった」<sup>46)</sup>という。ここに、これまでの考察とは異なった可能態と現実態の比較が可能である。すなわち、彼にとっては「見えない」ことが通常であり、可能態としての「見える」と現実態としての「見る」に齟齬が生じているということである。言い換えれば、「見たい」内容に視覚情報が加わったことによって、彼自身の身体観に違和感が生じたということである。

以上のように、我々は「現実態としての身体」及び「可能態としての身体」の双方を見ており、自らの基準によって現実態か可能態のどちらかに重きを置いている。それが、現実態としての身体が変容することによって、身体観に影響を及ぼす、と考えることができよう。

## 2-2. [まなざし]と身体観の関係から捉える身体的直観

以上の考察から、[まなざし]と身体観の関係についてまとめたい。前稿において、[まなざし]と身体の密接な関係が示されている。その身体は「固有の身体」である。固有の身体は、主体を他者との関係から捉える際に不可欠な構成要素であり、主体固有の領域である。主体は、この固有の領域によって自己と他者の差異を捉える。すなわち、主体が「固有の身体」を基盤に他者の「〈私〉とは異なる身体」を見出すからこそ、他者固有の身体へ[まなざし]を向けることができるのである。例えば、マイネル（1998）は、著書『動きの感性学』において「感性学的まなざし」について言及している。すなわち、「感性学的に観察する人は、むしろその動きに自ら参加しているのであり、動きを潜勢的に同時に行っているものであり、それどころか現実に動いてしまうことさえある。そのような人は、他者の運動行動のなかに、動きの意味と目的、その価値内容までも直接ははっきりと知覚する能力をもっているのである。このことは、その人が状況に深くかかわっている行為としての動きを見分ける確かなまなざし（Blick）をもっていることが前提になっている。」（括弧内引用者）<sup>47)</sup>と述べ、運動観察の基礎として[まなざし]を提示している。この[まなざし]は、身体的自己移入に支えられている。すでに述べたように、身体的自己移入は、運動観察の前提と捉えることができる。したがって、運動観察の基礎となる身体観は、自然科学的な観察ではなく、この感性学的[まなざし]が関係していると言えよう。言い換えれば、「固有の身体」を基に「行為としての動き」を見極める[まなざし]である。

この[まなざし]について、本稿では「身体的直観」という用語を提示したい。この身

---

45) カーソン[2010], 320頁.

46) カーソン[2010], 321頁.

47) マイネル, K., 金子明友編訳, [1998], 『マイネル遺稿 動きの感性学』, 大修館書店, 85頁.

体は、「可能態としての『できる』及び現実態としての『する』を含んだ身体」であり、その身体を基にした[まなざし]によって身体観を生成し、動的ゲシュタルトとしての固有の身体を見ているのである。

では、身体教育で扱うことができる身体観とは何か。この「身体的直観」について、参考として竹内敏晴（1988）の著書『ことばが劈かれるとき』の考察を参照し、検討する。

竹内は、劇団運営や学校へのかかわりから、「学校の体育とは何だろう」<sup>48)</sup>という問いを立て、小学校期の体育を「〈からだそだて〉」<sup>49)</sup>と解釈している。それは次の過程による。彼は、知育、徳育、体育の枠組みから明治時代における体育を捉え、「意思の力によって、いかなる苦難にも挫けずことを行ないうる強健な身体を作ること、つまりは、強い兵隊と、それを生む強い母体を作ることが目的だった」<sup>50)</sup>と理解している。すなわち、「体=肉体」の思想である。それに対し、「現在の学校体育は、スポーツ課とフリガナをふった方がよさそうだ。」<sup>51)</sup>と指摘している。このような「スポーツ課としての体育」に対し、彼は、「運動能力の発達と筋肉の強化は、子どもの成長について大切な事項であるけれども、それは、もっとひろい『からだそだて』の一分野として考えられる必要があるのではないか。」<sup>52)</sup>と主張している。この「〈からだそだて〉」ということは、学校教育の中においては、子どもの（先生も）からだ（と心）をいきいきとさせるための配慮とか方法のすべてを含めて言うのであり、それを体育と呼びたいのである。<sup>53)</sup>と説明している。さらに竹内は、「『体育=からだそだて』とは全教育というか『全科目の基礎としての児童の理解』ということになってくるだろう。科目としての体育というよりは『保健衛生』にあたることも含めて『教師たちが身につけるべき、ある考え方であると同時に、技術である』と言ってもいいかもしれない。」<sup>54)</sup>と主張している。すなわち、体育教員が特化して身につける思想や技術ではなく、教員全てが身につけるそれである、という主張である。

なお、体育のスポーツ化は、今日においても持続されていると言えよう。例えば、体育科教育学においては、「スポーツ教育」が主流になっている<sup>55)</sup>。学習指導要領における保健

48) 竹内敏晴, [1988], 『ことばが劈かれるとき』, ちくま学芸文庫, 240頁.

49) 竹内[1988], 241頁.

50) 竹内[1988], 241頁.

51) 竹内[1988], 242頁.

52) 竹内[1988], 242頁.

53) 竹内[1988], 242頁.

54) 竹内[1988], 260-261頁.

55) 例えば、1970年代から1990年代にかけて体育の概念が「運動による教育」から「運動・スポーツの教育 (education in movement: education in sport)」へ転換していることが挙げられる。高橋健夫ら編, [2010], 『新版体育科教育学入門』, 大修館書店, 33頁.

体育科の目標にも「生涯スポーツ」への発展が目指されている<sup>56)</sup>。

以上の竹内の考察から、次の身体的直観を見出すことができよう。すなわち、我々は他者の運動観察を行いながらも、その観察内容に他者固有の身体を含んでいる。この他者固有の身体は、主体固有の身体から比較された身体である。このような身体的直観によって、我々は他者の動的ゲシュタルトとしての身体を読み取っているのである。特にこの身体的直観は運動実践において際立つ。すなわち、プレー中の一瞬の判断は、身体的直観によって行われているということである。したがって、身体的直観によって生成する身体観は、「動的ゲシュタルト」としての身体を対象としており、「静的ゲシュタルト」としての身体は、「動的ゲシュタルト」を基に生成されている。

## 結.

本稿の目的は、身体教育において扱うことができる身体観について考察することであり、この考察を通じて「まなざし」と身体観との関係を明確にし、身体観教育の必要性を検討することであった。そのために本稿では、観察内容の差異によってどのように身体観が変移するのかを考察した。その結果、特に、スポーツ運動学において扱われている「運動観察」について検討し、その基礎となる運動観および身体思想を見出した。具体的には、「運動を見るのか、身体を見るのか」という問題に対し、次の結論を得た。

動かされている身体を見るのか、可能態と現実態を含んだ身体を見るのか、という観察内容の差異によって、運動観察の内容が変容する。その内容は、「今ここに動かされている身体から、彼/彼女がどのように動けるのか」を読み取ること、特に、「動的ゲシュタルト」を読み取ることなのか、「彼/彼女の『できる』という可能態と『する』という現実態

---

56) 現行学習指導要領では、「改善の基本方針」として「(ア) 小学校、中学校及び高等学校を通じて、『明るく豊かで活力ある生活を営む態度の育成を目指し、生涯にわたる豊かなスポーツライフ及び健康の保持増進の基礎を培う観点に立って無いよう改善を図る。(以下略)』。」(文部省, [1998], 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』, 東山書房, 2頁.) と述べられている。また、新学習指導要領では「改善の基本方針」として次のように述べられている。「(ア) 小学校、中学校及び高等学校を通じて、『体育科、保健体育科については、その課題を踏まえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図る。(以下略)』」。文部科学省, [2008], 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』, 東山書房, 3頁。

特に、新学習指導要領では、高等学校保健体育科の目標に、スポーツライフの文言が加えられている。「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的、計画的な実践を通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる」。文部科学省, [2009], 『高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編』, 東山書房, 11頁。



の関係に照らした運動能力」を読み取ることなのか、という差異である。この観察内容の変化を通じて身体観が変移し得る。それは、「イメージや科学的な知識の習得による身体観」から「運動実践を通じて具体的に現象している身体を直観することによって立ち現われる身体観」と言えよう。

次稿では、身体観の変容を探るための具体的な実践案を提示し、身体観が変容し得るのかについて検討したい。

### 参考文献リスト

- 金子明友, [1987], 「運動観察のモルフォロジー」, 『筑波大学体育科学系紀要』, 筑波大学, 第10号, 113-124頁
- 金子明友, [2005], 『身体知の形成(上)』, 明和出版
- 金子明友, [2009], 『スポーツ運動学』, 明和出版
- カーソン, R., 池村千秋訳, [2009], 『46年目の光——視力を取り戻した男の奇跡の人生』, NTT出版 (Kurson, R., 2008, *Crashing Through: The extraordinary true story of the man who dared to see*, Random House Trade Paperbacks.)
- シュミッツ, H., 小川侃編, [1986], 『身体と感情の現象学』, 産業図書 (Schmitz, H., 1972, *Über leibliche Kommunikation*, in : A. a. O. Heft 1, Jahrgang 20, S.4-S.32.)
- 新保淳, [2009], 「科学的身体論～身体における自然性～」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 29-37頁
- 体育の科学, [2005-2007], 「連載 体育人と身体観」, 『体育の科学』, 第55巻7号-第57巻8号, 杏林書院
- 高橋浩二, [2010], 「身体教育を通じた身体観の変容可能性の探究(その1) —運動実践における[まなざし]の考察から—」, 『大阪産業大学人間環境論集』, 大阪産業大学学会, 第9号, 139-155頁
- 高橋健夫, 岡出美則, 友添秀則, 岩田靖編, [2010], 『新版体育科教育学入門』, 大修館書店
- 瀧澤文雄, [1995], 『身体論』, 不昧堂出版
- 瀧澤文雄, [2004a], 「現象学的観点からの『心身一体観』再考:『身体観』教育の必要性」, 『体育学研究』, 日本体育学会, 第49巻, 147-158頁
- 瀧澤文雄, [2004b], 「日本における身体観の現状—現象学的観点からの分析」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第26巻2号, 17-25頁
- 瀧澤文雄, [2005], 「身体観の生成過程(その1) —身体観の成立要因およびそれについての質問紙—」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第27巻1号, 61-73頁

- 滝沢文雄・田中愛・高橋浩二, [2007], 「日独英比較から捉えた身体観の生成過程」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第28巻1号, 29-45頁
- 滝沢文雄, [2008], 「[からだ]の教育」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第30巻1号, 1-10頁
- 竹内敏晴, [1988], 『ことばが劈かれるとき』, ちくま学芸文庫（初版は1975年に思想の科学社より刊行されている）
- ブルデュ, P., 今村仁司・港道隆共訳, [1988], 『実践感覚1』, みすず書房（Bourdieu, P., 1980, *Le Sens Pratique*, Les Éditions de Minuit, Paris）
- ブルデュ, P., 今村仁司・港道隆共訳, [1988], 『実践感覚2』, みすず書房（Bourdieu, P., 1980, *Le Sens Pratique*, Les Éditions de Minuit, Paris）
- マーフィー, R・F., 辻信一訳, [2006], 『ボディ・サイレント』, 平凡社（Murphy, Robert F., 1990, *The Body Silent—The Different World of the Disabled*, W. W. Norton & Co. Inc.）
- マイネル, K., 金子明友訳, [1981], 『マイネル スポーツ運動学』, 大修館書店（Meinel, K., 1960, *Bewegungslehre: Versuch einer Theorie der sportlichen Bewegung unter pädagogischem Aspekt*, Volk und Wissen.）
- マイネル, K., 金子明友編訳, [1998], 『マイネル遺稿 動きの感性学』, 大修館書店（Meinel, K., *Ästhetik der Bewegung*.）
- 文部省, [1998], 『中学校学習指導要領解説—保健体育編—』, 東山書房
- 文部科学省, [2000], 『高等学校学習指導要領解説—保健体育編・体育編—』, 東山書房
- 文部科学省, [2008], 『中学校学習指導要領解説—保健体育編—』, 東山書房
- 文部科学省, [2009], 『高等学校学習指導要領解説—保健体育編・体育編—』, 東山書房